

北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

〜開拓編〜

第18回・水沢から平岸へ①

〜札幌の開拓と移民の募集〜

平岸の開拓は明治4年、今の岩手県水沢からの集団入植に始まります。北海道の開拓は、明治政府にとって重要な課題でした。当時ロシアは積極的な南下政策を推し進め、江戸時代後期には北海道周辺で数々の武力衝突事件が発生し、明治初期には樺太・千島列島にまでその影響力は及んでいました。明治政府としては北海道を開拓し、北方への備えとする必要がありました。戊辰戦争が終了した明治2年開拓使が設置され、札幌を北海道の首都(本府)とすることが決まると、周辺村落を形成するために本州から広く移民を募集することにしました。募集は東北諸藩、中でも仙台伊達藩を中心に行われました。札幌の白石区や胆振の伊達市がそうであるように、仙台藩からは多くの移民が北海道へ渡りました。これには理由があります。ここで水沢と仙台藩の歴史について簡単に触れておきましょう。

〜水沢の歴史〜

中尊寺金色堂を代表する世界遺産で有名な岩手県平泉、そこから十キロばかり北上したところに水沢は位置します(図1)。平成18年、周辺市町村との合併により現在は奥州市となっています。町の北部を西から東に流れる胆沢川によって作られた胆沢扇状地の東端に位置し、町の西側には肥沃な扇状地の平野が広がり、東側を南北に北上川が流れています。「水沢」の地名のとおり、扇状地の末端からは湧き水がいたるところで湧き出し、無数の小川となっています。この小川を町割りや堀に利用して、美しい街並みが作られました。江戸時代には、後述の留守氏(水沢伊達氏)の城下町として栄え、「みちのくの小京都」とも呼ばれており、今も往時をしのばせる武家屋敷が残されています(図2)。水沢は「偉人のまち」としても知られ、江戸時代には蘭学者の高野長英、明治以降には関東大震災の復興を指揮した後藤新平、海軍出身で総理大臣をつとめた斎藤実など優れた人物を多数輩出しています。

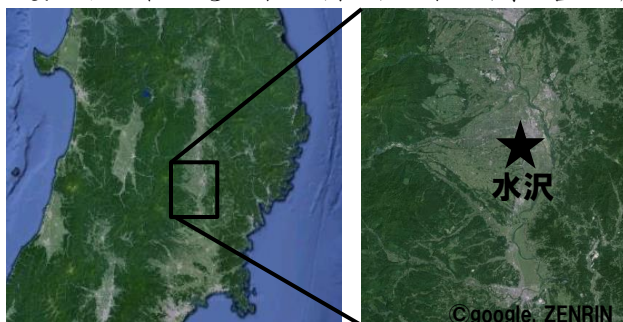


図1. 岩手県水沢付近の地形



図2. 水沢の城下町の風景

〈伊達家と留守家の歴史〉

大河ドラマで有名な“独眼竜”伊達政宗は十七代目の当主になります。戦国時代の時点で伊達家は奥州の堂々たる名門でしたが、勢力としては弱小でした。しかし、政宗の知略と家臣団の活躍で、徐々にその領土を拡張し東北の覇王と呼ばれる存在へ成長しました。領土の拡張を急ぐために、有力豪族と手を結び、縁戚となることで支配地域を増やしていきました。このとき取り込んだ豪族の中に留守氏がいます。留守氏の歴史は鎌倉時代にまでさかのぼる名門でしたが、勢力争いに敗れ、伊達氏を頼ることとなります。伊達氏は保護の見返りに、その実子を留守家の養子として送り込み、一族に取り込みます。その後、留守家は盛岡の南部藩への備えとして、水沢へ転封されます(水沢伊達氏の誕生)。有力豪族との融和策は、領土拡張という点では効果がありましたが、藩内に複数の「支藩」を抱え込むことになりました。

〈戊辰戦争と仙台藩の運命〉

戊辰戦争が起こると仙台藩は旧幕府軍側に立ち、奥羽越列藩同盟の盟主へかがれます。ときの水沢伊達家当主は邦寧、その人生も時代の波に翻弄されることとなります。邦寧は伊達藩主の代理として、白河口に出陣し、官軍と戦います。戦局が不利となり、藩論が恭順へと傾くと今度は藩主の命により降伏の使者となりました。敗戦により、仙台藩は62万石から28万石へ減封されます。これほど藩のために奔走したにもかかわらず、水沢伊達家への仕打ちはむごいものでした。1万6千石からわずか60石ばかりへ減らされます。さらには、水沢伊達家の家臣たちは本藩からみれば、家臣の家臣、すなわち陪臣にあたるため、すべて士分を取り上げられ、解雇されてしまいます。同様のことは他の「支藩」にも起こりました。岩出山伊達家(当別を開拓)1万4千石から65石、亘理伊達家(有珠郡を開拓)2万3853石から58石、白石片倉家(はじめ登別市、後に白石区を開拓)1万8千石から55石と軒並み減らされ、家臣たちの士分も取り上げられてしまいました。彼らは生き抜くために、新たな道を選ぶこととなります。

参考資料 新札幌市史第2巻、札幌市教育委員会

バックナンバーお届けいたします…ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

【編集後記】

この連載は地域サービスの一環として、昨年より道新永田販売所のお客様に「自然史編」、「縄文・古代編」とお届けしてまいりました。おかげさまで、多くの反響があり、この「開拓編」より平岸全域のお客様へお届けできることとなりました。この連載を通し、平岸により一層愛着を感じていただければ幸いです。また、昔の思い出や資料・写真など平岸の歴史に関わることをご存知の方はいくらでも結構です。お気軽にご連絡ください。

執筆者：道新永田販売所営業主任 伴野卓磨

1977年室蘭市生まれ。金沢大学理学部地球

学科博士課程(古生物学専攻)を修了後、六花亭

に入社。2011年より現職。

◇発行元◇

(有)北海道新聞永田販売所

〒062-0936

札幌市豊平区平岸6条13丁目7-18

Tel: 0120-128-3488

Fax: 0120-128-3588

◆この連載は毎月1日・15日の北海道新聞朝刊に折り込みいたします